

やまと 民俗への招待

鹿谷 熱

生駒十三塚の十三塚に治から大正生まれの人々から聞いた話を紹介した。十三塚に対しては、雨乞い祈願や安産祈願の対象であったが、その信仰についてもう少し考えてみたい。

明治32年（1899）に生駒郡長が奈良県に報告した「名勝旧蹟取調書」によると「災難及諸病ヲ免ント塚ニ紙ノ小旗ヲ奉シ賽シ又供物ヲナシ參詣スルモノ多シ」とあり、塚への信仰が初めて具体的に書き残されている。

摂河泉を一望できる「風景秀絶」の地で参詣者はおびただしいとある。十三塚越の道は龍田と大阪をつなぐ道で、かつてはかなり人通りがあったようだ、十三塚のすぐ南には茶屋が4軒あった。峠には明和2年（1765）に地元の人々によって造

立された地蔵石仏がまつられている。

この道は「業平道」とも呼ばれる。伊勢物語の主人公とされる在原業平が河内高安の里の女の元に通った道だとされ『河内名所図会』（享和元年

～1801）には「業平河内通古蹟として「笛吹松」や「衣懸岩」などが紹介されている。天理教の始祖中山みきの娘小寒が大阪へ布教に出向いたのもこの道だった。

大阪方面から、お産の守り神として崇敬する者が多かったというが、地元では雨乞いの時には松明を手にして塚の周囲を廻るものの、牛飼いもこの塚の草を刈り取ると祟りがあるとして、近寄らなかつたという。十三塚

生駒十三塚の十三塚遠景（1986年撮影）
『生駒十三塚』平群町教委刊より



地元で禁忌の感覚強く

は地元の人々には禁忌の感覚が強く、大阪など離れた土地の人々による流れ神的な信仰が強かった

ようだ。その流行神への信仰も、明治まででその後は衰えたようだ。だが十三塚という珍しい塚群への注目は、単に禁忌の感覚だけではなく、福貴畠以外にも意外な形で広がっていた。

安産を願う女性がこの塚を信仰するのは、塚が姫君と12人の侍女を埋めたといふ伝承や、神武天皇の皇后媛踏鞴五十鈴姫など女性神に関係している。生駒山系ではこの女性神に関する伝承が点々と広がっている。

大正11年（1922）の喜田貞吉の報告では、12人の侍女は皆死んで、姫宮一人が生き残り、この姫君を大和のある男が救い出し、男と妹背の契りを結んでその子孫で村

ほど離れた盆地部川西町には、助け出した男は佐治といい、この姫宮は実は天皇の姫宮で、佐治は姫が無事であることを見た。そこで草履を売りながら富中に伝えた。そのことから草履を献上することになり、姫宮13歳の時には、高十三石の扶持米を頂いたという。この草履は特別に作られた鼻緒の太い「御根太草履」で、皇室に献上されるものは「御召緒太」と呼ばれ、大嘗祭で使用され、その後下げ渡されたものが、いくつか残されている。

十三塚とは一体何で、どのような理由で築造されたのかという問題は残されたままだが、その広がりには驚かされる。（奈良民俗文化研究所代表）